

# 活動ピックアップ!

長岡  
地域  
Nagaoka  
チャレンジするきっかけをつなぐ  
かきがわひらき実行委員会



柿川周辺のシェアアトリエなどの拠点を歩いてめぐるおさんぽ型マーケット「かきがわひらき」。誰かのチャレンジを後押しできるイベントになればという想いから、初めての方でも出店しやすくなるよう出店料を低く設定し、出店の仕方について相談を受けるなど工夫しています。かきがわひらきをきっかけに人や場所がつながり新たな出会いが生まれています。今後も楽しみながら続けていきたいです。

## SUSTAINABLE DEVELOPMENT GOALS 長岡 みんなのSDGs

12 つくる責任 つかう責任  
生ごみを資源として有効活用  
株式会社 長岡バイオキューブ



長岡市生ごみバイオガス化事業の理念に共感し、設計・建設から運営・維持管理までを一括して行っています。生ごみを発酵させてバイオガスを取り出し、発電した電力を再生可能エネルギーとして販売。発電した電力の一部は電気自動車充電用として市民に還元しています。また、発酵残渣は補助燃料として有効利用し、今後は肥料としての活用も検討しています。これからも資源循環型社会の実現に貢献したいです。

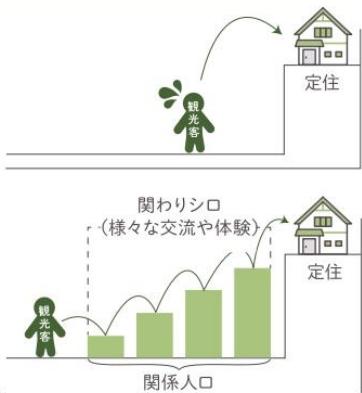
### 市民活動

### 研究テーマ

## 虎の巻

### 活動の「関係人口」はどう作る?

◀「解説動画」  
はこちら!



移住した「定住人口」でもなく、観光に来た「交流人口」でもない、地域と多様に関わる人々を指す「関係人口」。地方創生の柱にも「関係人口」拡大が掲げられ、いかに外の人に関わってもらうかが地域の持続性に不可欠だと言われています。これは地域に限らず、市民活動においても同様です。

「関係人口」は、移住・定住人口を増やすためのステップです。観光客がいきなりその地域に移住してくれることは想像できませんよね? 観光などでつながりができる人に、地域の人たちとの関係を深めていく機会を複数つくるのが関係人口拡大のポイントです。

### センターからのお知らせ

## 長岡市未来を創る 市民活動応援補助金

長岡市の未来を考え、その実現に向けて市民団体などが主体的に取り組む公益的な事業にかかる経費の一部を補助する「長岡市未来を創る市民活動応援補助金(未来共創補助金)」。ただいま申請受付中です! やってみたい企画のある方は、構想段階でもご相談に乗りますので、まずは協働センターにお越しください。

### 申請方法

事業実施の3カ月前を目安に  
協働センターへ相談にお越しください。  
●申請日時点において3年以上の活動実績がある。  
●前年度の予算規模が20万円以上である。

### 補助金額(補助対象経費について)

10万円まで:全額  
10万円を超える部分(上限50万円※):80%

※以下の要件を備えた団体が実施し、高い公益性や波及効果などが認められ、将来自立して長岡の目玉となり得る事業については、100万円を上限に補助する場合があります。

●申請日時点において3年以上の活動実績がある。

●前年度の予算規模が20万円以上である。

発行  
+カ  
+カ  
+カ

ながおか  
市民協働  
センター



テ  
940-0062  
長岡市大手通1丁目4番地10  
シティホールプラザアーレ長岡 西棟3F  
Tel. 0258-39-2020  
Mail. contact@nagaokakyojo.net  
[Facebook](#) [Twitter](#) [Instagram](#)

知る、つながる  
好きになる  
らこって

+カ  
つながる  
ラジオ

+カ  
市民活動の  
ポータルサイト  
コライト

配布場所

長岡市役所及び各支所、サービスセンターの他、  
市内図書館、コミセン、子育ての駅等、公共施設に設置しています。



知る、つながる、好きになる  
ながおか市民活動情報誌

## 「パートナーシップ・ファミリーシップ制度」って何?

特集  
新潟県弁護士 人権擁護委員会  
レインボープロジェクト  
黒田 隆史さん  
NAGAOKA PLAYERS  
桑原 舜人さん  
活動ピックアップ  
かきがわひらき実行委員会  
長岡みんなのSDGs  
株式会社 長岡バイオキューブ

# 「パートナーシップ・ファミリーシップ制度」って何？



黒田 隆史さん

弁護士。新潟県弁護士会 人権擁護委員会 レインボープロジェクトの座長として、性的マイノリティの課題に取り組む。教職員・生徒向けの講座「LGBT超基礎講座」や、行政職員向けの研修などを担当しているほか、様々なメディアで活躍。

ラブソングを聞けば、そこには当たり前のよう愛をうたう「僕」となりに「彼女」がいます。「僕」となりに「彼」がいるラブソングを聞いたことがある人はほとんどないのではないか？ 知らず知らずのうちに「恋愛や結婚は、男女がするもの」という常識のもとに、私たちの社会がつくられてしまっているかもしれません。しかし実際には性のあり方は多様で、「男性」「女性」というように簡単に分けられるものではありません。このような状況を変え、誰もが自分らしく暮らせるまちにしようと、長岡市では「パートナーシップ・ファミリーシップ制度」が始まりました。今月号では、新潟県弁護士会 人権擁護委員会 レインボープロジェクトの座長・黒田隆史さんに、この制度についてお話を伺いました。

## 「パートナーシップ・ファミリーシップ制度」とは

「LGBTQ」という言葉をよく聞くようになりますが、どのような意味なのか教えてください。



性的マイノリティの方たちの意識や尊厳、連帯の象徴として世界中で使用されている「レインボーフラッグ」。

—「パートナーシップ・ファミリーシップ制度」の導入を、どのように捉えていらっしゃいますか？

### 長岡市の「パートナーシップ・ファミリーシップ制度」について

性自認<sup>\*1</sup>や性的指向<sup>\*2</sup>により婚姻の届け出ができないカップルを対象とした「パートナーシップ」と、その親族が家族として生活する「ファミリーシップ」の届け出を受け付け、市が証明書を発行する制度のこと。証明書を提示することで、住民票の続柄に「縁故者」と表記したり、家族として市営住宅に入居したりできるようになります。

\*1出生時に割り当てられた性別にかかわらず、自分自身の性別をどう認識しているのかということ

\*2どのような性別の人を好きになるのかということ

黒田：制度の導入により、当事者たちは「市から私たちの関係を認められた」「社会に受け入れられた」と感じられると思います。若い世代の当事者たちが、長岡市での自分たちの生活をイメージできるようになります。また企業では、福利厚生の面で従業員とその同性のパートナーを、異性カップルと同じように扱えるようになると想っています。同性カップルがより認知されるようになり、性的マイノリティへの理解につながるのではないか？

## 制度の課題

### この制度に課題はありますか？

黒田：法的拘束力がないため、入院や離別などの人生の重要な場面で影響が出てくる可能性があります。例えば、同性のパートナーが入院した場合、法的に家族でないと面会できないことがあります。パートナーが入院中、一度も面会できずに亡くなってしまったという実例もありました。また体外受精などで子どもをもつ同性カップルもいますが、親権は片方の親しかもてません。すると、どんなにしあわせに暮らしても「親ではない」「子ではない」という想いを抱えるだけではなく、学校から重要な連絡が受けられないという状況も起こります。

### 解決は難しいでしょうか？

黒田：簡単に解決できる問題ではないと思っています。医療の面で言えば、性的マイノリティに限らず一人ひとりにより丁寧に対応できる

時間的・財政的余裕が必要ですが、現在の状況を考えるとなかなか難しいでしょう。同性婚が認められればいいのではないかという議論もありますが、法律が整ったとしても、周囲の人たちの理解が進まないと制度の運用 자체が難しいかもしれません。例えば、パートナーが救急搬送されるときに、周りの理解がなければ、一緒に暮らしている同性のパートナーではなく、離れて暮らしている血縁者に連絡がいくと思うのです。

—これまでの世間の常識とどうしてもぶつかってしまう部分がありそうです。

黒田：常識は壊して「小さく」するものではなく、違いをもった人たちみんなが入れるように「広げる」ものだと思っています。色々な人が集まって行っている市民活動が少しづつまちをよくしているように、色々な違いをもつ人たちがお互いを社会の構成員として認め合い、一緒によりよい長岡をつくりたいですね。

## 「みんなちがって、まあいいか」

—当事者の方がより暮らしやすいまちにするために、私たちにできることを教えてください。

黒田：日本人は真面目な方が多いので、悩みすぎてしまうところがあると思うのですが、当事者の方たちは特別な対応を求めている訳ではありません。「あ、そうなんですね」と言ってもらうだけで十分なんです。今は自分たちのことを「ふうふです」と言えないため、「そうなんですね」という言葉さえ言ってもらえない状況ですから。金子みすゞさんの言葉に「みんなちがって、みんないい」という言葉がありますが、「良い」とまでは思えなくても「みんなちがって、まあいいか」ぐらいに思えたらいいですよね。

私たちは、知らず知らずのうちに「性的マイノリティ」「外国人」「障がい者」というカテゴリーに分けて話をしがちですが、黒田さんの言葉にあるように、「障がい、年齢、性別に関わらずみんな大切な“ひとり”」なのです。色々な人が入れるように社会の器を広げていくこと。そんな考え方を大切にできるまちは、きっとみんなが協働できるまち。「みんないい」とまでは思えなくとも、「みんなちがって、まあいいか」と目の前にいる人の“らしさ”を尊重する姿勢を大切にしていきたいですね。

# NAGAOKA PLAYERS ウワサのあの人インタビュー！

桑原 舜人さん（22歳）

会社員／本条白山若翔会、越路歴史文化の会、こじまちづくり協議会

2000年旧越路町生まれ。地元の郷土芸能の研究や継承、越路地域の芸能保存団体との交流、意見交換を深め、芸能による地域活性化を目指している。また、地域の会合にも参加している。



## 越路の郷土芸能は 多世代間の共通言語

ルーツから継承されてきているから」と桑原さんは話します。来迎寺白山神社氏子総代会長の今井さんから神社の創建の歴史や祭り芸能の変遷を聞いたり、他地区の方から越路の豊富な芸能を教わったりもしました。「高齢者施設や保育園でしゃぎりを披露すると、お年寄りも小さな子どもたちもそれぞれに楽しんでくれ、この地の郷土芸能は世代を超えて私たちをつなぐ“共通言語”だと実感できます」。

越路の芸能文化の歴史に一層詳しくなり、また地域の人々の信頼も集めている桑原さん。歴史文化の会やまちづくり協議会の一員に抜擢されるなど、祭だけの交流を超えて、地域の将来を担う存在としても期待されています。「多様な立場の方々ができるを持ち寄ってつくり上げるところが、祭もまちづくりも似ています。郷土伝統芸能に対する関心の輪が若者の間に広がることで、地域そのものの活性化にもつながることを願っています」。



祭という共通の話題で、年の離れた世代との交流が深まりました。



活動の根っこ

時代に負けない  
芸能でつながる！

桑原 舜人

来迎寺白山神社氏子総代会長の今井さん（左前）、本条白山若翔会顧問とともに、神社や地元の歴史のほか、しめ縄づくりなどの習わしについても学びます。